

深澤晟雄村長没後50年・沢内病院開設60周年

生命尊重理念の継承誓う

深澤晟雄村長没後50年・沢内病院開設60周年記念行事は、8月22日銀河ホールで町内はじめ県内外から230人が出席して開かれました。深澤村長の生命尊重理念の継承と次世代へつなぐ決意を新たにす式典となりました。

元歯科医長と

作文コン表彰

第1部の深澤晟雄村長

没後50年記

念行事では、

「いのちの

灯文化賞」

贈呈式が行

われ、元沢内

病院歯科医

長の中里滋

樹氏を表彰

しました。

また、町

内の小中高

校生を対象

に実施した

「生命尊重

の心をつな

ぐ作文コンクール」の表彰式も行われました。

小学校低学年、同高学

年、中学校、高校の4部

門でそれぞれ最優秀賞に

輝いた太田奈子さん（沢

内小2年）、佐々木美結さ

ん（同6年）、小松楓さん

（沢内中3年）、東海林遥

さん（西和賀高3年）か

ら作文の朗読発表があ

り、出席者に深い感銘を

与えました。

病院の今昔と

思い出を語る

第2部は沢内病院開設

60周年記念行事で、北村

道彦西和賀さわうち病院

院長が生命尊重行政を推

進した深澤村長や沢内病

院勤務当時の思い出を、

第1部では加藤邦夫氏が、

また「いのちの灯文化

賞」を受賞した中里滋樹元

沢内病院歯科医長は、沢内

病院に新設された歯科初代医師として歯科予防活動に積極的に取り組んだ思い出を語りました。

記念講演は2人の元病

院長が生命尊重行政を推

進した深澤村長や沢内病

院勤務当時の思い出を、

第1部では加藤邦夫氏が、

また「いのちの灯文化

賞」を受賞した中里滋樹元

沢内病院歯科医長は、沢内

太田祖電氏逝去

式典見届け同志の元へ

旧沢内村長で本会初代理事長の太田祖電氏が8月23日午前4時3分、急性心不全のため逝去、93歳でした。8月27日に密葬が行われ、本葬は9月24日午後1時から碧祥寺で行われます。

氏は深澤村長当時の教

育長として村長と志を一

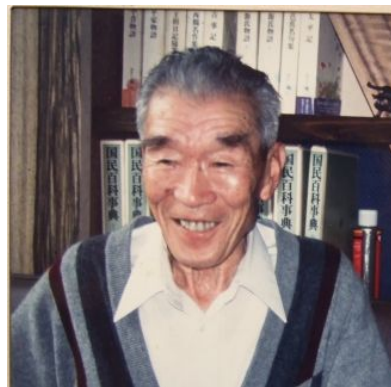
つに生命尊重行政を推進

その理念を継承して昭和

48年から50年間、沢

故高橋清吉さんの

「私の歩んだ道」 ⑦



＜清吉さんの軍隊逸話＞

昭和12年に召集されて中国は満州へ。日本軍が攻め行く先に先遣隊で派遣された清吉さんは、「日本軍が攻めてくる前に安全な地に避難するように」と勧め、中国人民の命を救った。それに感謝の意を込めた数枚の書が贈られている。

それを屏風に表具したのが左の写真だが、生命尊重の深澤村長と心通わす清吉さんらしい軍隊での逸話である。



「東アジアの平和・中日親善は永久に」と読める書の中に「日本軍のあなたは、民を愛し慈悲深かった」の中国語の書も見える

職員に対してあのような烈しい言葉を聞いたことがなかったし、自身、後にも先にもなかった。深澤村長に叱られたのは、私だけだったかもしれない。

その七、保健文化賞で東京に行った時、第一生命の昼食を接待された。沢内村と小田原市、それに個人でどこかの保健婦だったと思う。豪華な第一級の食堂で西洋料理であった。テーブルに向かって腰かけたまでは良かったが、ナイフやフォークの七つ道具の使い方も食べ方も知らない。

皿から飛び出す西洋料理

横目で村長と久保議長の方を見ながら真似たものの思うようではなかった。

みんなが手際よく切りさばいて食べるし、手がふるえ汗を流して皿のものをいじり回しているうちに、食べ物が皿の外に飛び出した。

向かい側の小田原市長が見かねたのか、食べながらこれは左利きの食べる道具で日本人は右利きだから、このようにして食べる道具がいいなあとフォークを箸のようにして給仕を促した。給仕は私の皿のもの

を細く切って皆にも箸を渡したが、三分の一も食べないで私はやめた。後で村長は、厚生課長は西洋料理には弱いなあと言われた。あの料理を満足に食べなかったことが今でも残念でならない。

その八、直病（国民健康保険直営病院）の赤字を解消して、黒字経営にすることと保健活動をする事が、私の任務だとすれば、直病に沢内の患者を吸収することと、医者にかかることを恥じであり、カマド倒し（方言で「破産する」こと）だと

思う主婦や老人、つまり当時の諦め型とか、がまん型の患者を無料診療してこの患者を村外医療機関に出さないようにすることを考えた。

それは直診と他の診療を区別して療養給付することで大変な問題があった。しかし、沢内には開業医もなく、直営診療ができるので、これは健康管理診療であるという強みがあった。初年度の試みとして70歳以上だったと思う。

終わり